

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 佐藤 暁

佐藤暁氏の論文「タイプとしての意味と実践的能力の命題的表現: ダメットの哲学に即して」は、「意味とは何か」という言語哲学の根本的な問いに対して、イギリスの哲学者マイケル・ダメットの議論に手がかりを求めながら、オリジナルな観点を打ち出すことで一つの方向性を探りだそうとする意欲的な論文である。全体として、「意味とは何か」をめぐる意味理論の独自性を浮き彫りにした後、ダメットによる「意味のタイプ説批判」を詳細に分析した上で、「レシピとしての意味理論」を提示するという、3章構成になっている。

まず第1章で、佐藤氏は、「意味とは何か」という意味理論の問いが、他の哲学的問いと比較して非常に特異であることを指摘する。たとえば、知識とは何か、については、少なくとも「~は・・・を知っている」という文の形式が問題になっていることは確定しているのに対して、意味に関してはそれすらも確定していない、と論じられる。こうした問題そのものの特異性を指摘した後、佐藤氏は、第2章において、「意味のタイプ説批判」に関して、ダメットの議論を検討する形で、徹底的な分析を試みる。佐藤氏はまず、意味が抽象的対象でありながら、特定の時空点に出現する、という私たちの基本的理解を確認した上で、そうした文脈で導入される「命題」の概念について論及する。「命題」は、一般に、文とその意味というのが決して一対一の対応関係ではないという事実から、文とは異なる意味の担い手、真理値の担い手として導入される。このような「命題」はある種の永続性・客観性・抽象性を持つと考えられる。こうして、「命題」を「タイプ」として捉えるという立場が出現する。

ここで佐藤氏は、「タイプ/トークン」という、よく知られた対概念について掘り下げた分析を展開する。佐藤氏は、言語の「トークン」を物理的な文字や音声と、「タイプ」を抽象的で時空的な位相を持たない存在者と見なすという、素朴な理解が成り立たないことを鋭く指摘する。むしろ、私たちは表現の「タイプ」を使用しており、それに直接的にアクセスしているのである。ここで、「命題」が表現の「タイプ」と重ね合わされ、意味をタイプと見なすという考え方が現れる。しかし、ダメットによれば、意味のタイプ説は、結局の所、言葉の意味が話者の心的作用に依存して決まるという考え方、アリス物語で「ハンプティ・ダンプティ」が語ったような言語観に至る。けれども、表現は何を意味したのかという問いのレベルではなく、なぜ表現がそのことを意味できたのか、という一層深層の問いのレベルで考えると、こうした「ハンプティ・ダンプティ理論」は意味理論として不十分である。かくして、第3章において佐藤氏は、以上の分析を踏まえて、そしてダメットの示唆を咀嚼する形で、言語表現が意味を持つとは、言葉を話せる実践的能力と不可分な事態であり、そしてその記述は一種の「レシピ」と見なせる、と結論づける。

以上のような佐藤氏の議論は、当然期待される「言語行為論」との突き合わせにまで至っていない点でやや不足感もなくはないが、「タイプ/トークン」の区別について明快な基軸を打ち出し、「レシピとしての意味理論」というきわめて独自で刺激的な視点を提言している点で、十分に学術論文としての基準をクリアしている。よって、本論文は博士（文学）の学位に値すると判断する。